

くろつけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成二十四年四月一日発行（毎月一回一日発行）  
第十八巻十二号（通巻第二一六号）

鈴



くろつけ

俳句雑誌

GLOCKE

第216号

4. 2012

パ  
フ

品川鈴子

鎌鼬出世ほくろを裂きにけり

常葉で血止め鈍りし鎌鼬

谷崎が筆止めし窓春の雪

怒り上戸にも訣れのお白酒



術前の訣れ白酒よほろ白丁ろにも

初雛に年子の兄も喃語増え

泣き寝入り頬に花びら貼りつきて

花句会帰路は四分咲ほどならん

紅枝垂指に挟みて花のパフ

ネーブルを挽ぎ万葉の恋塚へ



# 玉

# 鈴

# 吟

大阪 中尾廣美

夏々と夫の下駄音初詣  
神苑の金の日の斑や淑氣満つ  
あらたまの茅の輪瑞々しき匂ひ  
初社龍の破魔矢は夫が買ふ  
嫁ぐ子が抽いて大吉初神籤

大阪 中田寿子

履き馴れた靴を磨いて去年今年  
引きしぼる赤のマニキュア弓始  
鮪糺家一軒が買える値に  
水鳥や潜りもぐりて城守る  
夕食の仕度気になる風邪の妻

神奈川 永塚 尚代

明けましてお手柔らかにと言はれけり  
新年会坊主めぐりで大泣きに  
恋人のように湯たんぼ抱きしめる  
どの顔も成人式の長睫毛  
北風に向かう羽毛と空気に着て

大阪 野口喜久子

独居も喰積だけは手作り  
咳ひとつ拳に人れて決断す  
猫舌に躍らせさます七日粥  
棘ささる指歳末の灯に透かし  
張込みを天職として悴めり

兵庫 蓮尾みどり

破魔弓をそびらに赤子呵呵大笑  
太公望須磨の寒風待ちかねて  
寒の磯釣糸垂れるロダンの像  
冬の海須磨に平家の悲話いくつ  
初しののめ敦盛塚の手向け花

兵庫 長谷川鮎

茅<sup>かや</sup>屋<sup>や</sup>葺替う村道を通行止  
竹の秋隣の借家引越しに  
あらわなる木目の温き心柱  
休憩の野球少年花の下  
処女塚左右を守るは八重桜

兵庫 林 哲夫

篝火にほつと佇み初詣  
初鏡小一の子も母真似て  
小さき手も皺の手もあり初みくじ  
きやうだいで大吉出るまで初みくじ  
寒の餅孫の練習そと覗く

兵庫 林 美智

骨折に口と箸以て雑煮喰ふ  
帰国の児咽喉を通らぬ雑煮餅  
産土の十日戎も遠退けり  
初夢を語ろうとして又忘れ  
誘はれて咏み手ひきうけ歌留多会

愛媛 福島 松子

さびの部分だけの鼻歌湯気立てり  
飾売店の許可証首に掛け  
父の背で寝てしまいたる春着の子  
すぐ駆ける幼な追いかけて空っ風  
髪染めて悪ぶる子等も初詣

愛媛 福田かよ子

部活の子北風きた向く先頭交代し  
冬霧を分けて里山一万歩  
眠る山登るバスあり客一人  
紅さして一人の正月むかえおり  
寒の鯉口・口・口出ず池の面

兵庫 藤井久仁子

本鮪財布逆さにして買ひぬ  
三が日舌嚙む外は事の無し  
一籽に国旗一竿初詣  
身を案ずる震へ字のあり年賀状  
年玉の袋動かず抽出しに

兵庫 藤田かもめ

凧に昂り跳ねるブルドッグ  
手控へのメモ書き移す年用意  
木戸口に揺るる繭玉寄席雛子  
竜吐水置かる回廊雪しまく  
常念じょうねん岳ねんの雪形探す童たち

愛媛 藤田 宣子

年明くる術後の視界広ごりぬ  
割烹着ふんわり湯氣の薺粥  
枇杷咲くや老齡の知恵湧く豊か  
眼の手術時を待つ間の粉吹雪  
手術室棟ゆれる程の虎落笛

兵庫 史あかり

あるがままなるを諾ひ初鏡  
木枯にトロイの木馬黙し立つ  
メルハバとにこやかな笑み毛皮商  
地下都市の迷路屈みて冬帽子  
ボスポラス冬の海峡甘き紅茶チャイ

兵庫 古井公代

はつゆめに怪獣来しと真顔の子  
別姓で成婚の友初便り  
凍滝を背に足ぶみのアナウンサー  
初弾きのミサ曲母子片手ずつ  
去年今年ひとりの脂湯に淡く

大阪 古林田鶴子

餅つきはお囃しリズムの子供会  
進むみち語りつきぬや除夜の鐘  
年毎に賀状の減りて八十路行く  
「なにはさてー」とクイズの続き事始め  
初えびす赤き幟の町を染め

香川 細川知子

クリスマス僧侶にもらふプレゼント  
餅の杵バットのやうにあつかへず  
遡り潮波の数ほど鴨を連れ  
初稽古白馬ひらりとバーを越え  
初みくじ天然記念樹へ背伸び

兵庫 細野恵久

橋を吊る太き鋼索燕くる  
辛夷咲く変哲もなき山ながら  
轉りにはがきひらひらさせて行く  
ただ嗅いでみるだけのこと蓬揉む  
「故郷」を歌ひ眼前おぼろなる

愛媛 松井洋子

仔豚より値の張る小鳥年の市  
仏徒なる我まで忙しき聖夜  
歳晩の夕日長居す大樗  
歳旦のお祓ひを待つ列うねる  
大往生と思へばのそり冬の蠅

埼玉 松木清川

日向ぼこの猫撫で犬に吼えられり  
初春のお医者通ひは五日から  
快癒せし人も集ひて謡初め  
榎櫃の実幹の分岐にちよこなんと  
どぶ川に何を漁るか鴨番

愛媛 松本恒子

夫なき八十路を生きて露の臺  
寒に入る手に一滴の化粧水  
冬日向針穴かざし糸通す  
子の任地地図にさがして日の短  
いとほしや盆梅開く二つ花

愛媛 三浦澄江

大晦日鉄橋きざむ貨車の音  
裂け石榴そつ歯を出して自嘲せり  
寒の水二合の米を研ぎ澄ます  
柚子湯出て女菩薩の如き顔  
震災の仮設住宅師走の灯

兵庫 三枝邦光

初鏡明けて十五の孫娘  
寒の水こぼす蹲ひ群ら雀  
冬草や瓦礫の原の二つ星  
化粧せぬ母の水櫛初鏡  
掛樋の寒水閼伽に六地藏

兵庫 水野範子

妣の手の温もり欲しや年男  
悴みし手を握りあふ敵味方  
思案して買ひし海鼠の青光り  
寄り添ひて匂友の絆福寿草  
雪中花新種病に嗅覚失せ

兵庫 水野弘

背を丸め婆ちゃん縁に円向ぼこ  
友の声聞けぬ句会や春まだ来  
年賀状出せぬあせりに友の夢  
友の住に残る新酒も味気なし  
娘等帰り残る食積老二人

香川 三橋早苗

毛染する上目遣ひの初鏡  
由緒ある小間の茶室に隙間風  
家元と膝突き合はず初茶湯  
五十鈴川背にして並ぶ初写真  
正宮の幕吹き上ぐる初松籟

茨城 三輪慶子

女正月宮部みゆきを二三冊  
影富士や利根のほとりのどんど焼き  
どんど焼き笹の先なる餅の焦げ  
初旅や見失ひたる夫の背  
影富士や寒の内なる富士見台

埼玉 向江醇子

きざまれし海鼠にもある故郷は  
春愁「それから」をまた読み返す  
早春の店を出でたり香買ひて  
春寒や待機電流の目が光る  
八十を越えし二人の鬼やらひ

兵庫 村田とくみ

てきばきと動かぬ手足日の短か  
曲る毎に姫大山の紅葉濃し  
神の留守出雲へと着く寝台卓  
仏前の梨に歯型のくつきりと  
極月の研師助っ人二人つれ

佐賀 森山子月

収穫の喜び満ちて冬市場  
ホレホレと赤子皆抱く三日なり  
福笹の一片までも返納す  
毒蜘蛛を弔ひて降る小雪なり  
凍て針の注射器みつめ信じきる

# 鈴の奏

品川鈴子選

風花は思惟仏の思惟妨ぐや  
兵庫 荒木 稔

出無精はならぬと呵る冬の賜  
雪晴れや離ればなれに家十戸  
目をつむりしみじみと尿年の夜  
竜の目のみな上を向く年賀状  
兵庫 平田恵美子

帰られぬ子の名も記し祝箸  
初鏡会ふたことなき祖世の顔  
六甲の北は小雪のちらつくと  
渡り鳥運河に交通整理人  
東京 松本 アイ

盆栽の雑木紅葉に迷い込む  
時雨日の何事もなく戸閉りす  
談笑し黄落ふみしむ同期会  
抜け道も知られ混み合い松飾り  
兵庫 池田 久恵

元旦の陽光部屋に百歳の父  
間引かれず細き大根出番待ち  
寒き朝あずき粥の香すみずみに  
春著にて髪へしきりに手を遣りぬ  
高知 山村 一翠

人の日の犬のあくびを見てをりぬ

黒猫のついと振り向き寒に入る  
冷え性の妻に寒九の厨事  
買初めのおもちや両手に兎のもとへ  
兵庫 野沢 光代

初鏡紅濃く淡く戦中派  
山茶花や斎垣残さず歌刻み  
支えられ歩みゆつくり日脚伸ぶ  
黒豆を煮つつ指折る五七五  
兵庫 先山 実子

初風呂の夫のナツメ口厨まで  
縫始め眼鏡いらぬと意地をはり  
日脚伸ぶ夫少年と将棋さす  
福笑い納まりきれぬ人もいて  
山口 山本 敏子

歌留多とるかたきのような顔をして  
鳴りかけて止めば気になる初電話  
縫い初めは師の知恵借りてヒナ型で  
スーパ―のおせちで過ごす三が日  
東京 樋口 正輝

足腰をかばいながらの初詣で  
密柑むきあつと云う間の松の内  
プラ容器だけの晩めし細雪

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評  
四句〜十五句 岩崎可代子 //

\*選句は全て 品川鈴子

目をつむりしみじみと尿年の夜 荒木 稔

歳を重ねるとともに人知れぬ悩みのひとつに排尿障害がある、殊に男性は前立腺の具合で尿の排出に困る向きも多い。諺に「出物腫物所嫌わず」と言うが、健全な生理現象こそなにより専いのだと、年改まる夜の便所で尿のいとおしさにふと臉を伏せる。

初鏡会ふたことなき祖母の顔 平田恵美子

産まれた時には既に亡くなっていた祖母に、一度逢って見たかった。祖母の話は誰彼からも聞いて写真などでは知っている。皆口を揃えて私が祖母にそっくりだと言っただから祖母は最も慕わしい身内の一人。

お正月の鏡には洩い晴着姿の祖母が居る。美系の隔世遺伝は不思議なめでたさ。

盆栽の雑木紅葉に迷い込む 松本 アイ

盆栽は陶磁の鉢などに植物を育て樹姿を整えて自然の雅

趣を表して鑑賞するもの。雑木の紅葉をみつめている裡に深い森に何時しか迷い込むような大きな景色に見えてくる。

この趣向は東洋的で、芸の細やかさや奥の深さは、俳句も同じこと。十七字の盃で大海原を掬い取る文芸にとっぷり嵌まつて居ましょう。

抜け道も知られ混み合い松飾り 池田 久恵

お正月は何処へ行つても人・人だけれど今日は大丈夫、抜け道を通れば容易く行ける筈と車を走らせてみたもの甘かった！渋滞に巻き込まれながら「松飾」の措辞によりお正月気分を何処かで楽しんでる様子が窺える。

「松飾る」から「松飾」へ動詞から名詞に変わるだけなのに、冬の季語が新年の季語に移行するのも面白い。

冷え性の妻に寒九の厨事 田村 一翠

最近では余り詠まれなくなつたが寒九とは寒の入りの一月五日頃から九日目のこと。最も寒さが厳しいとされるこ

の時期に、長年連れ添った妻は今日も台所に立って、作者の為に料理を作っている。冷え性の奥様を思いやり早く暖かくなって欲しいと願われる、優しさと労りに溢れたお句。

山茶花や齋垣残さず歌刻み

野沢 光代

小春日和の一日、参詣を済ませふと目を留めた齋垣にはすべて歌が刻まれていた。折からの風に山茶花の花弁がはらりと散った。雅な世界にタイムスリップしたかの様なひととき。神社などに巡らされている齋垣は、神聖な場所に設けられみだりに越えてはならないとされている。このことから「千早振る神の齋垣も越えぬべし」あなたへの思いは齋垣も越えそうだ」と万葉集や拾遺集、和泉式部集などに詠み込まれ遺されている。

日脚伸ぶ夫少年と将棋さす

先山 実子

少年とはお孫さんのことと推測させて頂いた。今日も将棋を指しでしたが仲々勝敗がつかない。「日脚伸ぶ」の輪旋から実力伯仲のお二人とお見受けした。何時の間にかこんなに強くなってと、少年の中に頼もしさ成長の証を感じておられる作者。お幸せな光景が見えるようだ。

鳴りかけて止めば気になる初電話

山本 敏子

ふいに居間の電話が鳴った。「ハイ、ハイ」と返事をし乍ら受話器に手を伸ばした途端ピタツと止んだ。お正月早々誰かしら？間違ひ電話？悪い事であれば良いけれど、ま何かあれば又掛かってくるでしょ、と思うことに。誰もが経験する事柄を上手くまとめられた。

蜜柑むきあつと云う間の松の内

樋口 正輝

お年玉を貰って晴着を着て独楽を回してと、待ち遠しかった子供時代のお正月。奥様や出入りの人の声で活気に満ちていた壮年時代のお正月。あの頃はすべき事、したい事が沢山あった。今年のお正月は人混みに押され乍ら初詣を済ませただけ。炬燵に入って一房の蜜柑を口に含めば、知らぬ間に時は流れて行く様だ。

隙間風この家に死せし人の息

増本 明子

もう住み続けることの出来なくなつた舅、姑の為に家の片付けに向いた作者。立派な拵えの部屋、ふと見上げるとこの家で生まれ、又この家に嫁したご先祖様達の遺影が目に入った。ピシッと閉め切っているのに何処からともなく入り込む隙間風。それがあたかもこの家で亡くなつた方達の息に感じられたのだ。研ぎ澄まされた感性の鋭いお句。

# 第十六回 ぐるっけ賞発表

## 受賞二名

第一席 「インドシナ」

吉田 和子

秋暑しビルの九階領事館  
菅笠の農夫を穩す稲の波  
朝霧を擦り抜けて来る手漕ぎ舟  
紐つきの蟹うごめける生簀舟  
水牛がバスを止めたる秋日和  
秋扇やクメールの昔話聞く  
宮廷の青芝戦車据ゑしまま

## 俳句の部

第二席 「海明け」

平田恵美子

海明けや喜寿を迎へて見ゆるもの  
早春といふ明るさに連れ出され  
乗り継ぎを五つ重ねて大花野  
咳き込めば三毛も咳く仕草せり  
鮫肝を注文したる夫は下戸  
きようこそは留守電にして煤払  
道行は老人ホーム除夜の鐘